

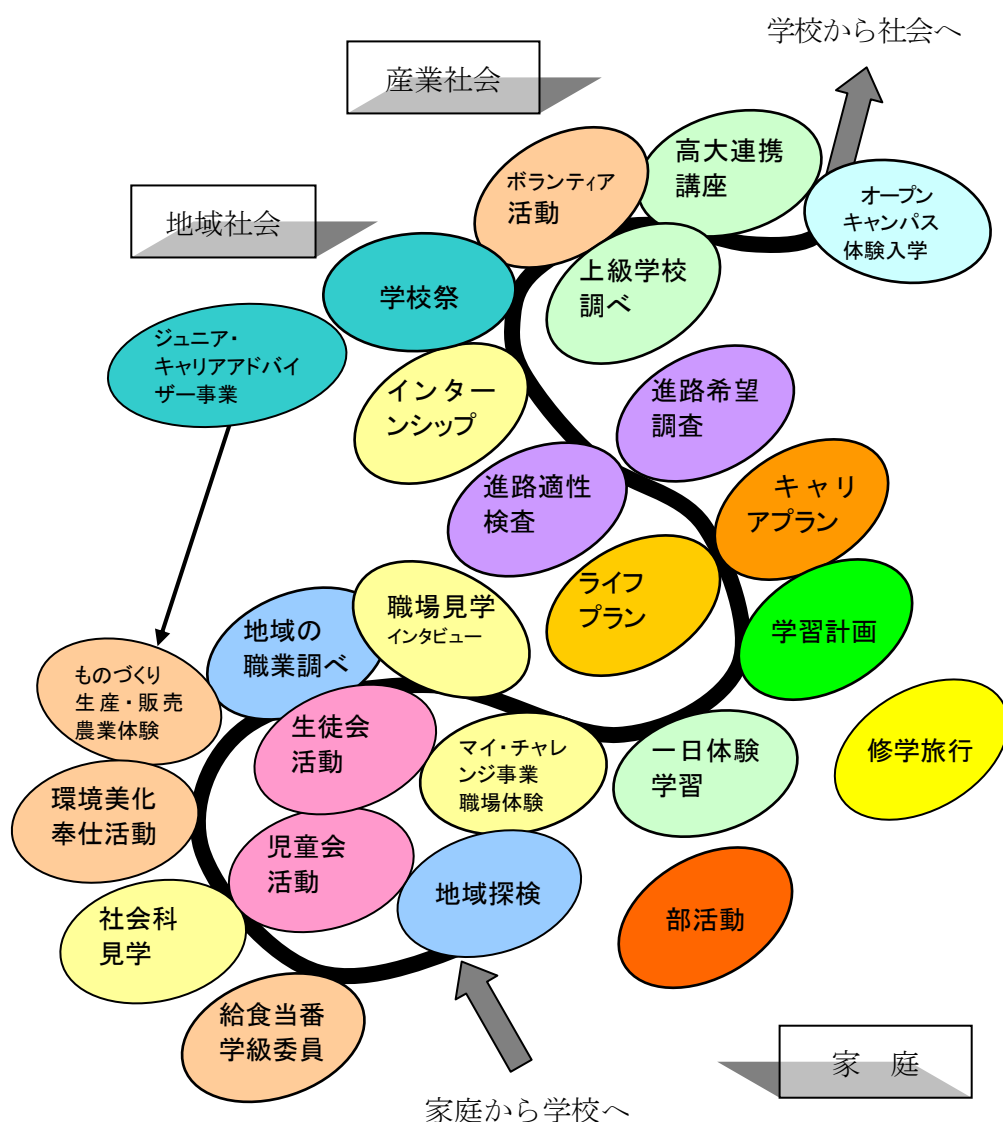
Ⅱ 組織的・体系的なキャリア教育を実践するポイント

— 「能力や態度」の育成を軸とした学習プログラムの開発に向けて —

小学校から高校までの学校教育の各段階では、様々な学習活動や諸活動が組織的・計画的に行われています。しかし、職場体験やインターンシップのように、進路指導としての位置付けやねらいが明らかにされている活動ばかりではありません。

このようなことから、本章では、現在の中学校、高校の進路指導の計画や実践をとらえ直して、諸活動を「能力や態度」の育成を軸とした学習プログラムへと再構築するための考え方や工夫について紹介します。

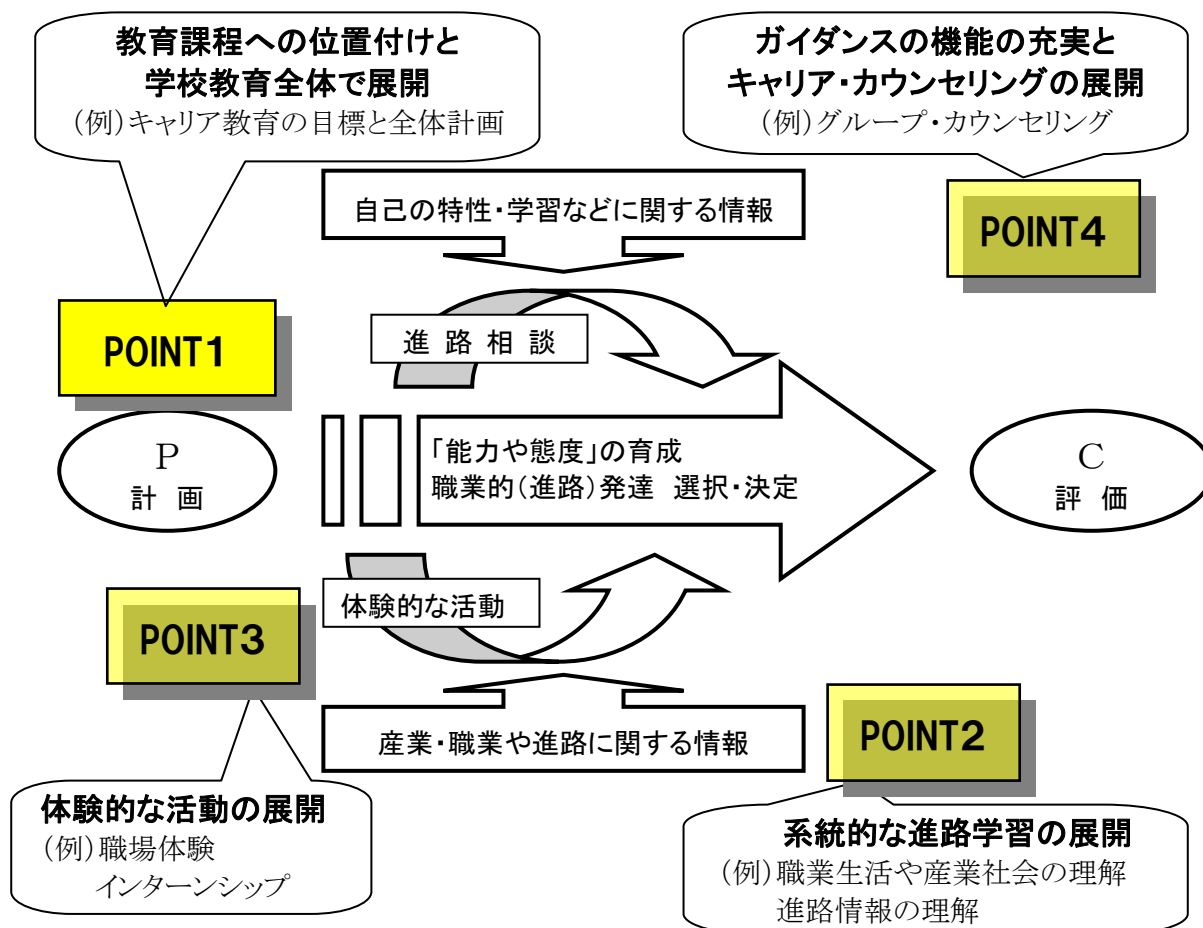
イメージ図 キャリア教育を実践する学校の教育活動や諸活動の例
(小学校段階から高校段階まで)



■ 「能力や態度」の育成を軸とした学習プログラムとは？

キャリア教育を実践するということは、育成を目指す能力や態度を具体的な目標として設定して、生き方や進路に関わる諸活動を相互に関連付けながら展開することにほかなりません。そのための指導計画、教材、指導マニュアルのまとまりを学習プログラムと呼びます。一つ一つの学習プログラムが、計画、実践、評価のまとまりとなっていますが、全体計画（全体構想）のもとで、複数のプログラムが関連し合い効果的に展開されるように、下の図のようなイメージを大切に開発していくことが求められます。

イメージ図 能力や態度の育成を軸とした学習プログラム展開
と本章で解説するポイント



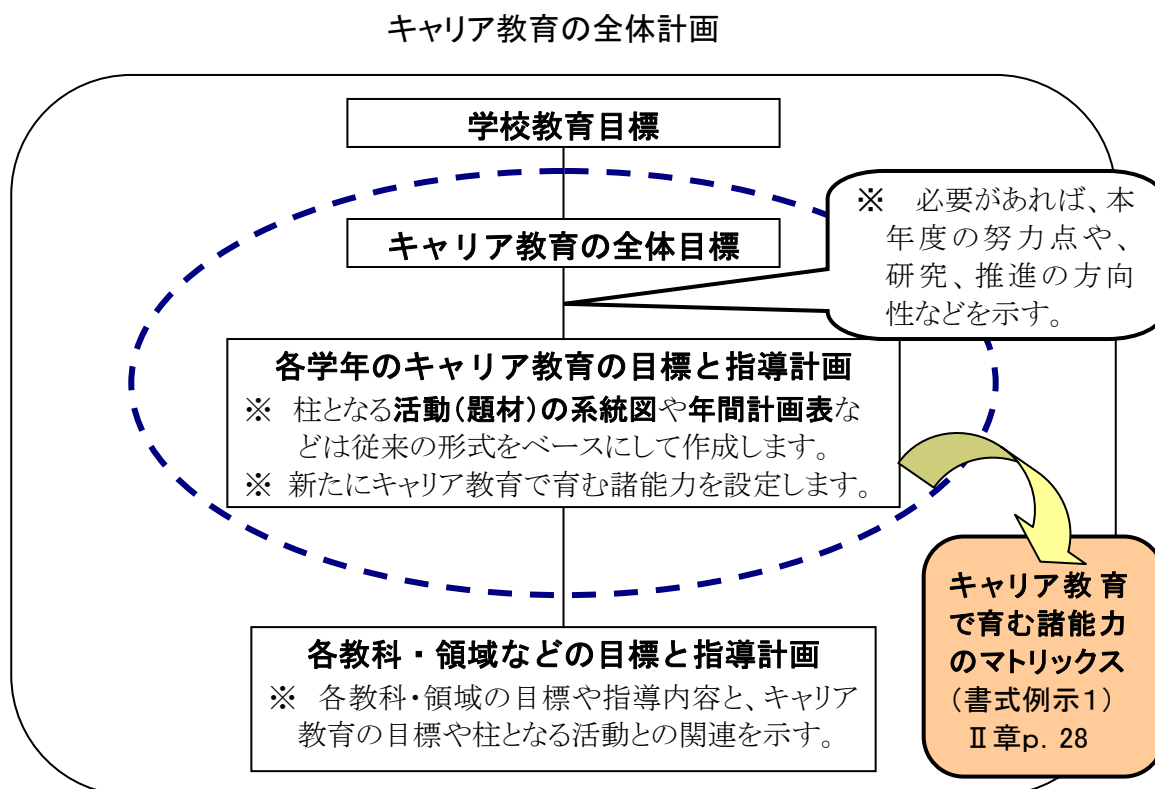
- 本章では、イメージ図に示した四つのポイントについて、事例や資料を示して解説します。

POINT 1 キャリア教育を教育課程に位置付けて、学校教育全体で展開する

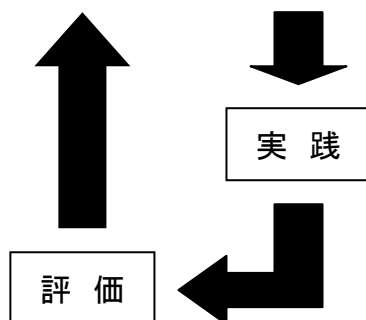
学校の教育活動全体を通じて、児童生徒の発達段階に応じた小学校段階からの組織的、系統的なキャリア教育の推進に取り組むためには、教育課程への位置付けとその工夫が求められます。

中学校や高校では、これまでの進路指導計画を、「能力や態度」の育成を軸としたキャリア教育の指導計画に移行することが可能と考えられます。具体的には、諸活動の目標にキャリア教育で育む諸能力を設定して、計画、実践、評価の一体化を図ります。

■ キャリア教育の全体計画(全体構想)の作成と展開



- ※ 児童生徒の自己評価を重視して、活動の振り返りを促す。
- ※ 次の実践につなげたり、今後の計画の改善に役立てたりする。



- ※ 実践にあたっては、目標に設定した「能力や態度」の育成を主眼として指導・支援する。
- ※ 評価にあたっては、目標に設定した「能力や態度」に着目するだけでなく、児童生徒の「能力や態度」の変容を幅広くとらえる必要がある。

解説6 キャリア教育で育む諸能力の設定

全体計画を作成するためには、まず、全体の目標や各学年の目標に、育成すべき能力や態度を設定する必要があります。このためには、次に示すようなキャリア教育で育む諸能力のマトリックスを作成すると、具体的な能力や態度の育成という観点で、現在の進路指導の諸活動相互の関連、あるいは各教科や他領域との関連付けを図ることが容易になります。

■ キャリア教育で育む諸能力のマトリックス(書式例示1)

キャリア教育の全体目標 ※ 従来の学校進路指導目標をベースに設定 ※ 必要があれば、キャリア教育推進のテーマを設定する。						
学 年 ※ 中高一貫教育校では適切に区分を設定する。				第○学年	第○学年	第○学年
学年のキャリア教育の目標 ※ 発達課題や柱となる活動に着目して設定する。						
実践の柱となる活動 ※ 体験的な活動のように、複数の能力を伸ばすことが期待される学校全体の取組を示す。				(中学校の例) ・職場体験 (高校の例) ・大学の公開講座		
育成を目指す諸能力 (職業的(進路)発達に関わる諸能力)				具体的な能力や態度(意欲も含む)		
領域	領域説明	能力	能力説明			
(例) 人間関係形成能力		(例) 自他の理解能力				
		(例) コミュニケーション能力				
(例) 情報活用能力		(例) 情報収集・探索能力				
		(例) 職業理解能力				

※ 育成すべき能力や態度やその具体例については、p. 23、24の表に示した項目などを参考にして設定します。

※ 必要があれば、領域を追加したり、再編成したりします。



○ 各教科・領域との関連

※ 従来の計画と同様に関連する内容を示します。
※ 各教科・領域の計画に新たに目標を追加する前に、まず、従来の目標をとらえ直して、キャリア教育で育成を目指す能力や態度と関連の深い項目を選び出して示します。

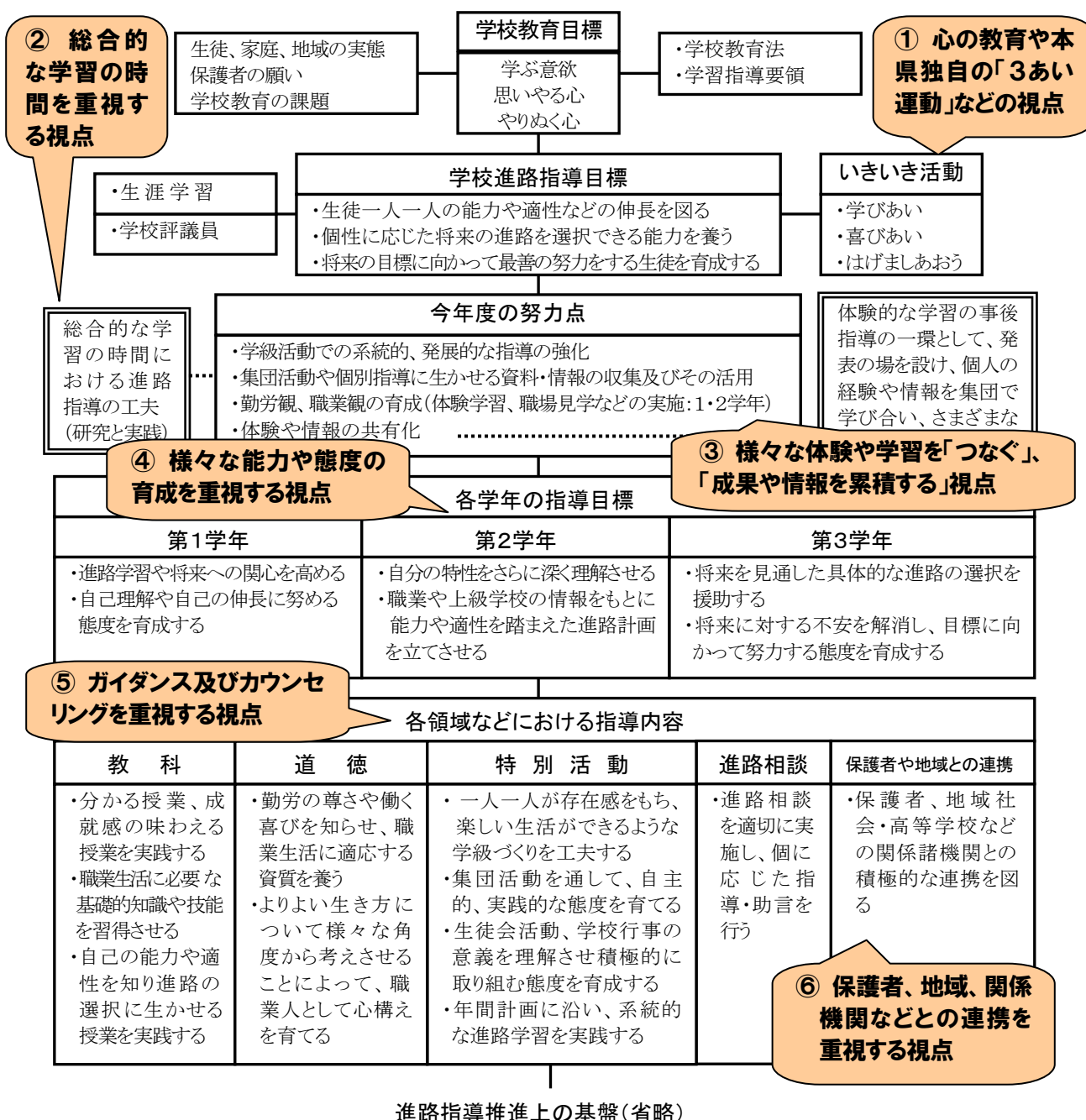
事例紹介

ここでは、中学校の進路指導計画の形式を例にして、キャリア教育の指導計画作成の考え方を説明します。

事例8〔中学校〕現在の進路指導計画からキャリア教育の視点を読み取る

この中学校の例のように、現在の進路指導計画をキャリア教育の視点で見直すことができます。

■ 進路指導の全体計画(全体構想)について



■ 進路指導の全体計画(全体構想)を見るポイント

※ 前ページに示した全体計画の①～⑥のそれぞれの視点について説明します。

① 心の教育や本県独自の「3 あい運動」の視点

社会性や人間関係形成能力の育成の面からも、キャリア教育と共通する方向性をもった視点と考えられます。

② 総合的な学習の時間を重視する視点

総合的な学習の時間で育成しようとしている能力や態度の多くは、キャリア教育においても重視されます。総合的な学習の時間で育てようとする資質や能力と、キャリア教育で育成を目指す能力や態度とを比較検討したり、関連付けたりすることが大切です。

③ 様々な体験や学習を「つなぐ」、「成果や情報を累積する」視点

「キャリア」とは、個々人に累積されていく経験や能力全体を意味するものです。それぞれ別個の体験や学習、情報を生徒がつなげられるように、諸活動を体系化することが求められます。

④ 様々な意欲や能力や態度の育成を重視する視点

キャリア教育で育成を目指す能力や態度を目標として位置付けます。また、評価の観点として、より具体的な項目を設定する必要があります。

⑤ ガイダンス及びカウンセリングを重視する視点

キャリア教育では、生徒指導や学習指導と連携して、学習や集団へのよりよい適応や、科目や進路の選択及び決定を支援するために、ガイダンスならびにそれを相補う関係にあるカウンセリングの充実が求められます。

なお、各教科、領域と進路指導の関連を機能させるには、それぞれの活動が本来もっているねらいを確実に達成していくことが不可欠です。

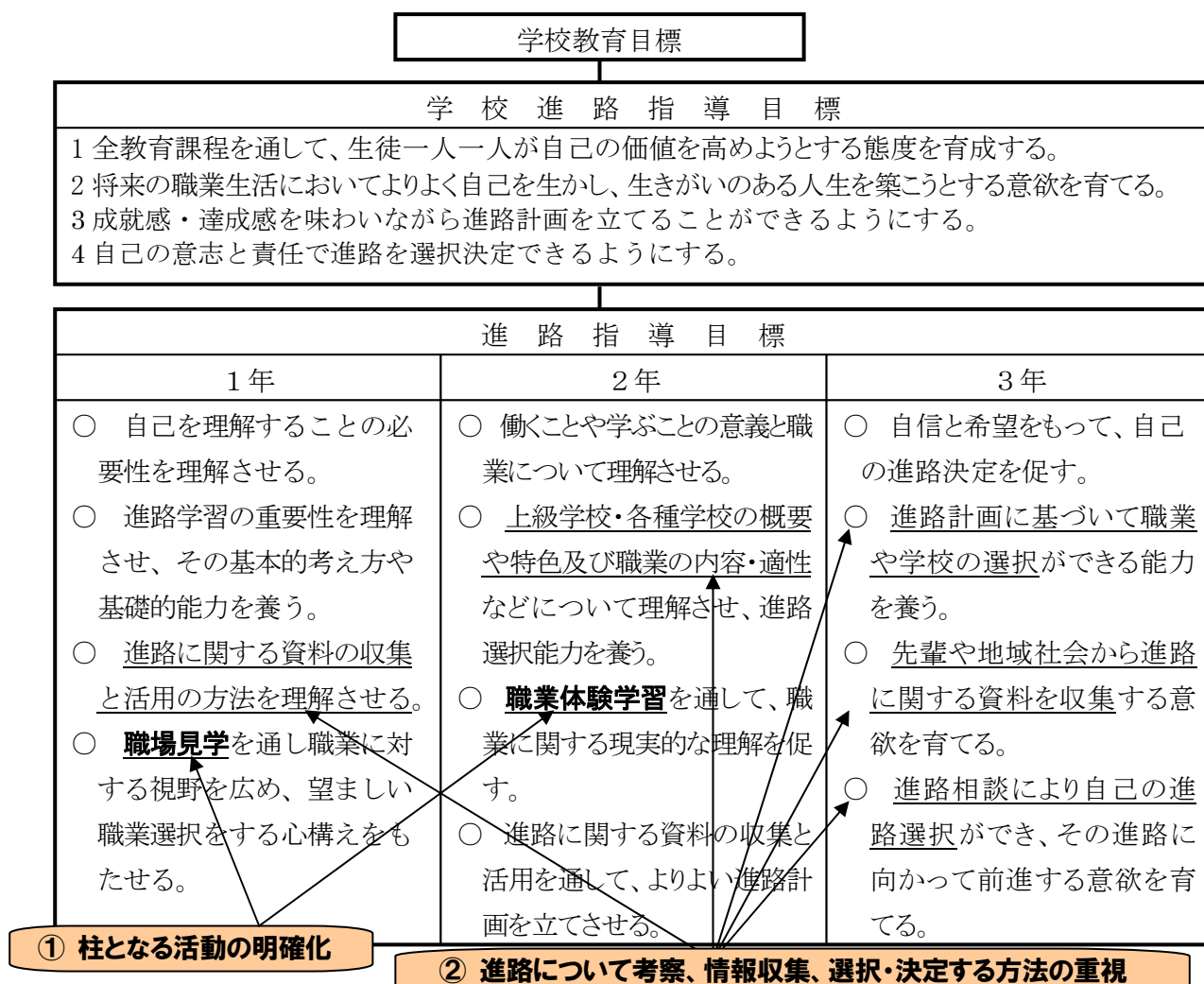
⑥ 保護者、地域、関係機関などとの連携を重視する視点

これまでも、進路指導は、保護者や地域の人々との連携をより深める方向で改善されてきました。今後は、具体的な活動や生徒の姿を通して、キャリア教育のねらいを社会に広く知ってもらえるよう推進することが大切です。

事例9〔中学校〕現在の進路指導の目標からキャリア教育の視点を読み取る

この中学校では、進路指導の目標を設定する際に、将来の生き方や進路を考える能力や態度の育成に着目して、全体計画を作成して実践を進めています。

■ 進路指導の目標について



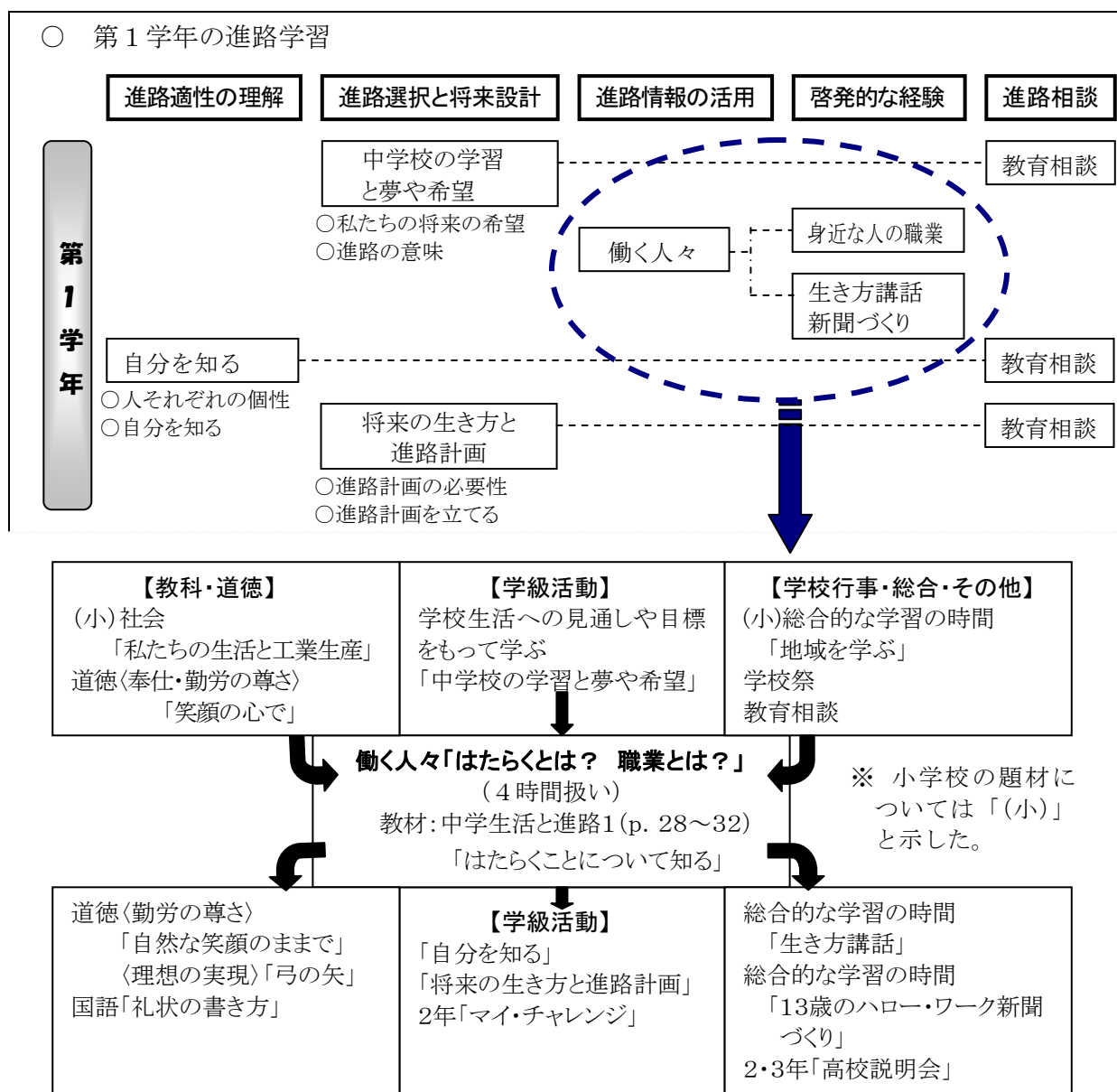
事例から学ぶこと

- ① 現在の進路指導計画から、キャリア教育の指導計画へ移行する際には、育成すべき能力や態度（意欲を含む）をより具体化して設定し、諸活動を関連付けたりや位置付けたりすることが求められます。
- ② 中学校や高校では、小学校よりも個人の選択や意思決定の機会が次第に増えると考えられます。そこで、具体的に進路について考察したり、選択・決定したりするために必要な知識や方法など、生き方や進路についての学び方を重視する必要があります。

POINT 2 目標や評価の観点を明確にして系統的な進路学習を展開する

キャリア教育では、社会や経済の仕組みについての現実的理解を図ることが求められています。そのためには、職業生活や産業社会に関する基礎的な知識や理解が重視されます。体験から学ぶだけでなく、系統的に学習することも必要です。すでに、中学校、高校のいずれにおいても、題材の系統や年間計画に基づいて進路学習が展開されています。今後は、単元や題材の系統性を重視するとともに、目標や評価の観点を明確にして適切なガイダンスと個別指導が行われるようにします。

■ 題材の系統



事例紹介

ここでは、中学校と高校の進路学習の取組を例にして、系統的な学習プログラムを構築する考え方を説明します。

事例 10〔中学校〕目標や評価の観点を明確にした進路学習を実践する

この中学校では、キャリア教育の視点を生かして活動のねらいを検討し、生徒の自己評価を促すように、ワークシートの改善に取り組んでいます。

■ 学級活動を柱とした学習プログラムの構想(題材の指導計画)について

1 単元名

「働くとは? 職業とは?」(1学年)

2 単元の系統図(省略)

従来の目標と対比することが大切である。

育成すべき意欲や能力・態度を幅広くとらえる必要があるが、指導に力点を置く項目を明らかにする必要がある。

3 単元目標

本単元での目標	キャリア教育の視点からの目標(◎重要 ○やや重要)
1 職業や働くことに興味をもち、これについて学ぶ意欲をもつ。	人間関係能力 (自他の理解能力、コミュニケーション能力) ○自己の職業について、興味や関心をもつ。 ○インタビューを通して、大人とのコミュニケーション・スキルの基礎を習得する。
2 自分の関心のある職業を認識し、さらに深く知ることに関心をもつ。	情報活用能力 (情報収集・探索能力、職業理解能力) ◎生き方や進路に関する情報を、インタビューを通して、調査、収集できる。 ◎勤労の意義や、働く人の様々な思いが分かる。
3 働く人の具体的な姿を通じて職業の多様な面を知り、関心をもつ。	○職業や仕事のあらましを理解する。
4 広く生き方について多様な観点をもつとともに、勤労観や職業観を育む。	将来設計能力 (役割把握・認識能力) ○職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。

従来の目標の抽象的な部分を、具体化する。

4 単元計画

時間	学習活動	指導と支援	キャリア教育で育む諸能力	評価方法
第1時間	単元「いろいろな職業」 1 テーマの意識化 ・「働く」とはということかを事前のアンケートをもとに発表する。 ・「働くこと、職業について」考えようとする。 2 職業の多様な面について考える。 ・進路ノートを見て、ワークシートに分類する。	・導入部分であるので、生徒のもつ多様な考えを肯定的に受け止め、引き出すようにする。 ・作業を通して、様々な職業の存在や、職業の多様な面をとらえさせる。	人間関係形成能力 (コミュニケーション能力) ・友達と協力して、学習に取り組むことができる。 情報活用能力 (職業理解能力) ・職業や仕事のあらましを理解する。	学習観察 発表 学習観察 ワークシート

単元(題材)の目標に示していないが、グループワークを展開する際の評価の観点として設定してある。

5 事前及び事後の指導のポイント

- (1) 事前のアンケート（「働くこと」）をもとに、生徒の職業に対する理解や見方などについて把握します。
- (2) 3学期に将来設計シートを作成する際に、今回のワークシートを参考にさせます。
- (3) 身近な働く人々に対するインタビューを通して、第2学年のマイ・チャレンジ活動に必要な、大人とのコミュニケーション・スキルの基礎を身に付けさせます。

従来の題材の系統だけでなく、能力や態度の育成の視点から事前・事後の指導をとらえる。

■ 体験的な活動(インタビュー)のワークシート

身近な人の職業調べ調査用紙

(平成18年1月実施)

- 1 答えていただいた方の名前【 ○○ ○○さん 】
自分との関係 【 おば 】
- 2 働いている人に質問し、答えていただいたことを記録しよう。
☆ インタビューの前と後に、「よろしくお願いします。」「ありがとうございました。」とあいさつしよう。

一方的な聴き取りとならないように自分の紹介も加えるようにさせる。

質問の内容	答えていただいたことの記録
①職業名と、仕事の内容や特色	薬剤師、保健薬局の調剤
②この仕事をやろうと思ったのはなぜですか。	医療の仕事をしたかったから。
③この仕事をやっていて一番つらかったことは何ですか。	会社を休めない。責任が重い。

質問例は提示してあるが、自分で設定できるようにしてある。

3 調査を終えての感想

薬剤師という仕事は具体的によく分からなかったが、お話を聞いてよく分かった。
「薬」を扱う責任の重い仕事であることが分かった。

「A」になるようにするためには、どんな質問をするとよいか考えさせる。

4 調査を振り返っての感想

- (1) 自分から進んで情報が集められましたか。 A ㊦
- (2) 職業や生き方についての情報の集め方が分かりましたか。 A ㊦
- (3) 聞いたことはわかりやすく記録できましたか。 ㊦ B C
- (4) 聞いた人の職業の内容について分かりましたか。 ㊦ B C
- (5) 聞いた人の仕事や生き方に対する考え方が分かりましたか。 A ㊦ C

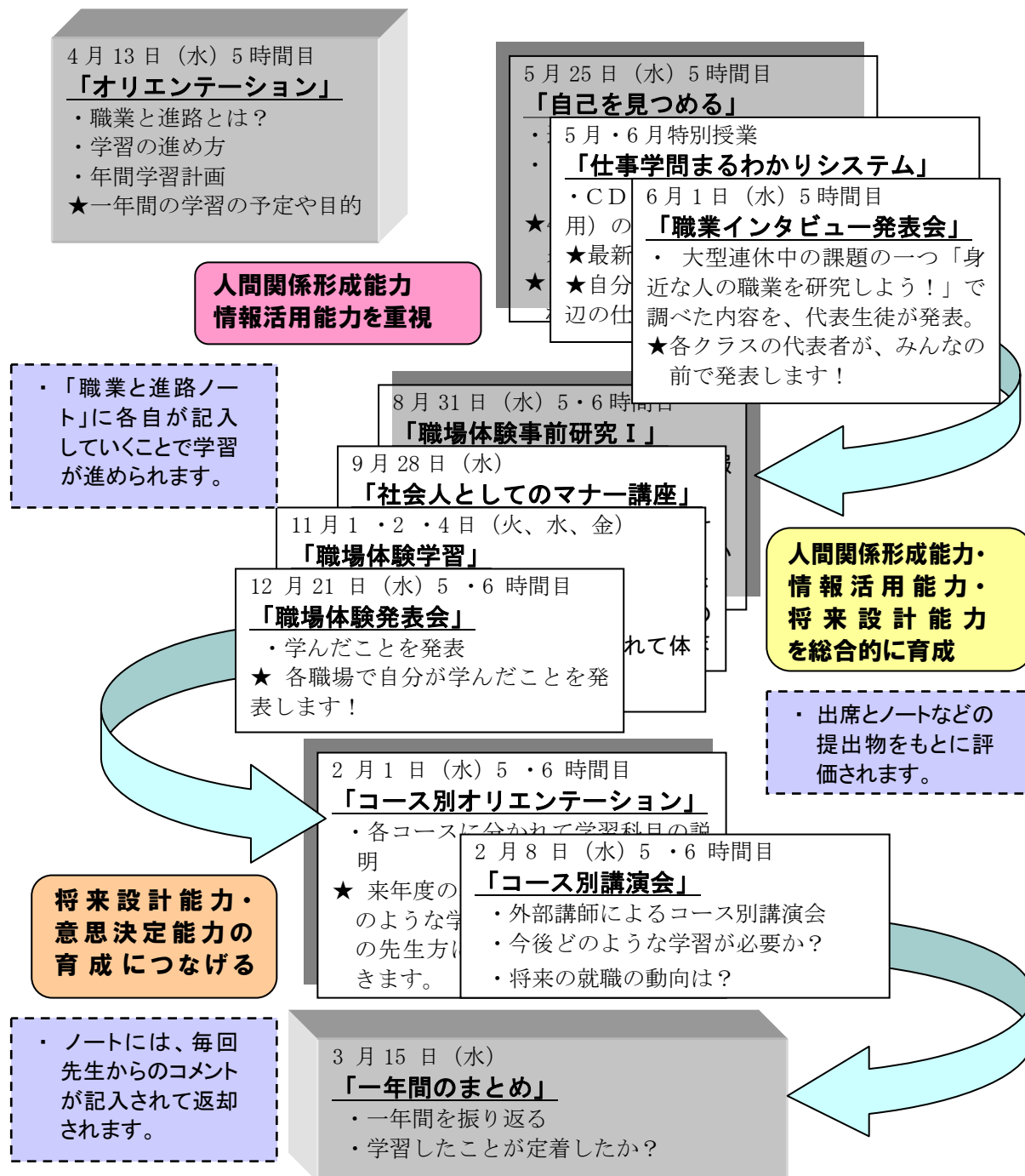
質問例

・その仕事を選んだ(決めた)理由 ・その仕事につくために必要な資格や免許、それを取得する方法 ・その仕事のよいところ、生きがい ・その仕事につらいところ、たいへんな点 ・その職業を希望する中学生へのアドバイス

事例 11〔高等学校〕総合的な学習の時間で進路学習を展開する

この高校では、第1学年の総合的な学習の時間を、進路について考察する活動を中心として展開しています。第2学年以降のコース選択につながるように系統的な進路学習となっています。

■ 総合的な学習の時間における系統的な進路学習の展開例



進路ノートを用いて、教科などと同様に評価を重視した指導を行っています。また、インタビューやインターンシップなど、体験的な活動を取り入れた系統的・総合的な学習プログラムを実践しています。

■ 学習の成果はポートフォリオとして活用する

進路説明会、講話、体験的な活動などの多様なプログラムを設定しても、児童生徒一人一人の受け止め方は異なります。このようなガイダンスの機能を高めるためには、諸活動を通して児童生徒の考え方や態度がどのように変容したのか、的確に把握する必要があります。

この学校では、進路ノートの記事内容を評価して、前後のガイダンスと関連付けたり、個別のフォローを行ったりしています。また、ノートに記入した内容はポートフォリオとして、学習の振り返りや定着を促すことに役立てています。

[進路ノートの記述例]

○ 学習のテーマ 進路の学習に関するオリエンテーション

○ 学習して分かったこと・感じたこと

私は高校に入学してから「不安」や「焦り」を強く感じていました。部活に入りたくてこの学校を選んだものの、両立に悩み、早く自分に合った自主学習の方法を見付けなければと焦っていました。

今日の先生の話聞いて、自分の進路について、先生方が一生懸命協力してくれるのだと分かって安心しました。厳しい口調での話も私たちに後悔してほしくないからだと感じました。「努力して入る学校に行ってください」という先生の言葉を大切にして、3年間努力したいと思いました。

私の将来の夢は、保育士か看護師になることです。そのための具体的な進学先は決まっていません。この後、夢は変わるかもしれませんが、とにかく勉強して選択肢を広くもつことができるようにしたいと思います。

○ 疑問点や調べてみたいこと

国立(公立)と私立ではどのくらい授業料などに差があるのですか。

(教師のコメント)

5/11の職業と進路の授業で詳しく説明しますね。

(教師のコメント)

自分の気持ちをこうして表現できることはとても素晴らしいことです。

高校生活に対する不安や焦りは誰でも持っているものです。それを自分なりにどう処理していくかが成功の鍵となると思います。ここに書いたように、まず一生懸命やったという充実感を得ることでいいのではないでしょうか。時にはリラックスしながら努力を続けてください。

将来設計能力や意思決定能力の支援に力点を置いています。

■ 個別のフォローのポイント

- ・情報提供は、できるだけガイダンスの場で収集したり、主体的に調べ学習で得たりするように促す。
- ・相談や個別のフォローが必要な内容を峻別する。

事例から学ぶこと

① 従来の進路指導の目標をキャリア教育の視点で見直す。

従来の進路指導の計画をキャリア教育の指導計画に移行する場合、従来の目標との違いを十分に検討することが大切です。

② 活動の成果はポートフォリオにまとめる。

キャリアは経験の積み重ねによって形成されるものです。活動を振り返り、継続して指導できるように、活動の成果をまとめたノートやワークシートは、ポートフォリオとして活用することが大切です。

解説7 キャリア教育の視点を生かして単元の指導計画を作成するポイント

単元や題材の指導計画の書式は、特に定まっていませんので、各教科や総合的な学習の時間などの指導計画に準じて作成することになります。

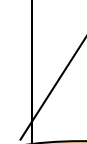
それぞれの教科及び領域ごとに作成する場合もありますし、いくつかの教科、領域の活動にまたがる学習プログラムのスタイルも考えられます。現在は、研究開発の段階であることから、数年間をかけて書式なども更新しながら整備していくことになります。アメリカなどの例に見られるように、包括的な発達段階に応じたガイダンスプログラムを構築するには、長期的な学校経営上の取組が必要です。

■ 単元や題材の指導計画検討の手順

- (1) 一つの学習プログラムとしてまとめる場合には、まず、柱となる領域や教科の指導計画をもとにして作成します。中学校や高校の場合には、主に特別活動や総合的な学習の時間に位置付けられる活動が柱となる例が多いようです。
- (2) 単元あるいは題材の目標を設定する場合、現在の目標をキャリア教育の視点でとらえ直します。キャリア教育の視点で新たに目標を設定し直す方法と、従来の目標はそのまま、新たに目標を追加する方法とがあります。
- (3) 指導計画には様々な目標や評価の項目を設定しますが、どの程度具体的なレベルで設定することが適切であるかは、実際の指導や評価の場面を想定しながら検討して決めます。
- (4) キャリア教育の評価では、児童生徒一人一人のキャリア発達の状況を的確にとらえ、学習の成果をポートフォリオなどにまとめて生徒に自己評価させるようにします。このためのワークシートやノートの活用は、単元の指導計画にきちんと位置付けます。また、これらの資料は、評価だけでなく、カウンセリングにも活用します。

■ 単元や題材の指導計画（書式例示 2）

次の例は、同時期に展開が予定されている各教科及び領域の学習内容を、単独あるいは一つの学習プログラムとしてまとめる際の書式です。

1 キャリア教育の単元名（題材名） 「・・・」（○学年）					
2 単元設定の理由 （略）					
3 キャリア教育の目標					
目標（キャリア教育に関連の深い目標） （例） ○国語 ・相手や場に応じて、相手の意図をくみ取り、自分の意志や意見を適切に伝えようとする。 【 関心、意欲、態度 】 ○総合的な学習の時間 ○特別活動(学級活動)	キャリア教育の視点からの目標 （例） コミュニケーション能力 ・				
具体例を示して、評価に活かしやすい項目を設定する。					
4 単元計画					
次程	教科及び領域	学習活動	指導と支援 (指導上の留意点)	キャリア教育で育む諸能力または評価の視点	評価方法
1	※ 単独の教科、領域の場合、省略する。	単元(題材)または学習内容「……」			・発表メモ (原稿、他の班の発表を聞き取ったメモ)
単元計画に評価項目に示した場合、評価項目を別に示さなくてもよい。					
5 キャリア教育における具体的な評価項目					
次程	学習事項及び評価項目の説明	人間関係形成能力	情報活用能力	将来設計能力	意思決定能力
1	(1) いろいろな職業 ・○○……		◎		
2	(2) 身近な人の職業	○	◎		

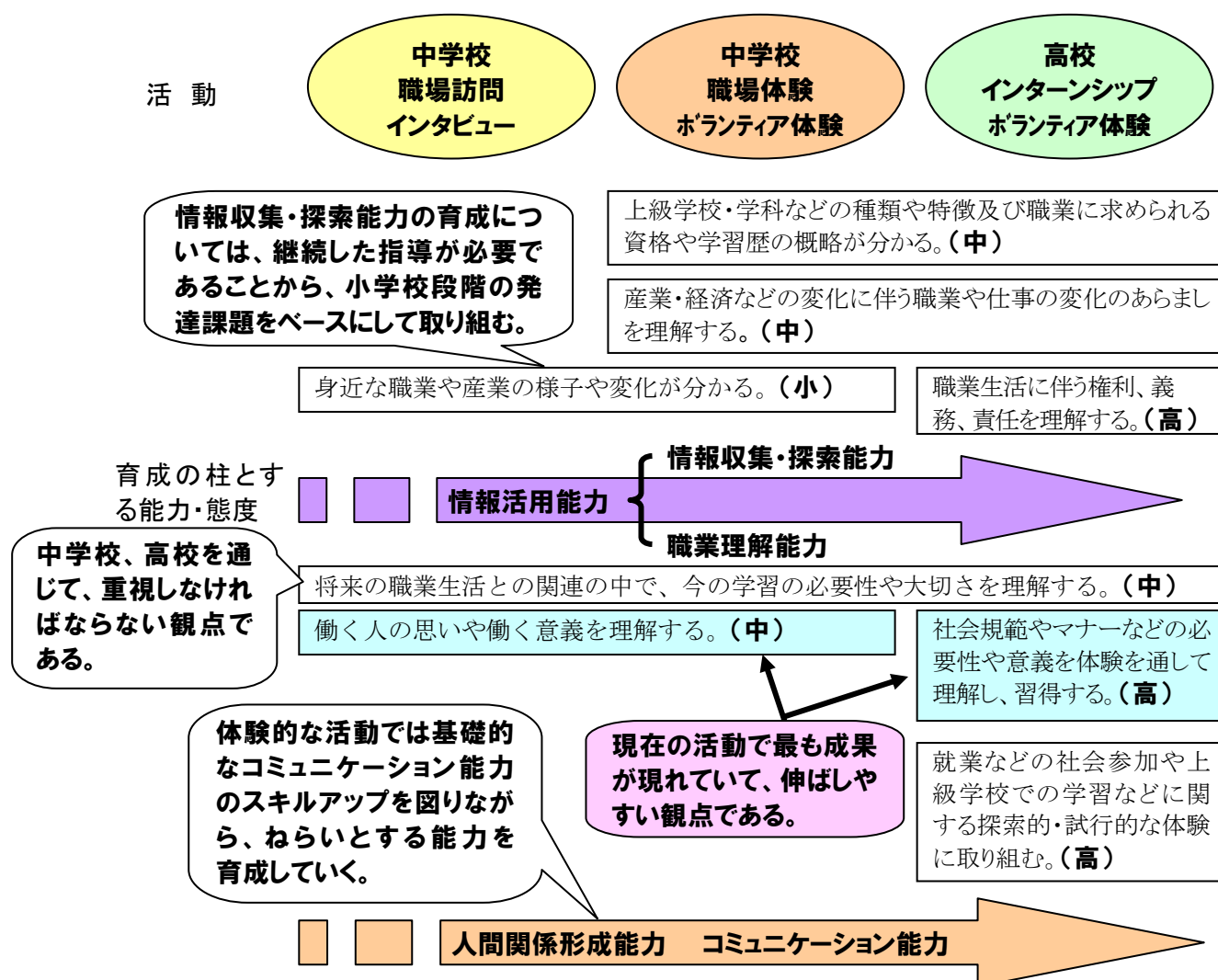
POINT 3 活動のねらいを明確にし、能力や態度に着目して体験的な活動の成果をとらえる

体験的な活動は、児童生徒が手応えや充実感を得やすく、キャリア教育実践の柱となるものです。しかし、ねらいがあいまいなまま実践に取り組んでしまったり、感覚的な評価にとどまってしまったりする例も見られます。また、手応えや充実感が得られたとしても、一過性の活動に終わってしまうといった問題点が指摘されています。体験的な活動がどのような能力や態度の育成をめざしているのか明確にするとともに、活動の前後でどのような意識の変容がみられたかを的確に把握して、記録にとどめておく必要があります。

■ 伸ばしやすい能力と伸ばしにくい能力を明らかにする

イメージ図 職場体験、インターンシップなどの体験的な活動を情報活用能力の育成を中心に見た場合

〈 ※ p.23、24 に示す小、中、高の各段階の具体的な能力や態度を引用（小）（中）（高）〉



事例紹介

ここでは、中学校のマイ・チャレンジ事業と高校のインターンシップの取組を例にして、キャリア教育における体験的な活動の展開のポイントを説明します。

事例 12〔中学校〕心の教育の視点を生かして社会体験活動を実践する

この中学校では、心の教育の視点から、第2学年の生徒に対して、マイ・チャレンジ事業に基づく社会体験活動を実施しています。

○ 活動のねらい(指導目標)

地域の人々との関わりを主とした社会体験活動を通して、生徒が大人の考えにふれ、共に生きる心や感謝の心を育て、自己の在り方や生き方を見つめさせます。

関連する能力 → 人間関係形成(自他の理解能力)、情報活用能力(職業理解能力)

○ 活動の留意点

- ・社会人としてのあいさつや言葉づかい、マナーは、日頃の生活でも心がけよう。
- ・体験したことや出来事は、家の人と進んで話し合うようにしよう。

関連する能力 → 人間関係形成能力(コミュニケーション能力)、情報活用能力(職業理解能力)

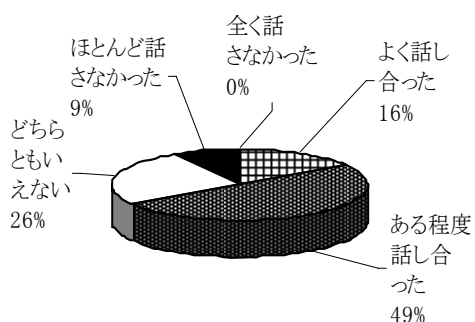
○ 活動のまとめの視点(まとめの項目)

※ 学習の深化のためには、アンケートや自己評価シートに、ねらいや活動の留意点に基づいた項目を設定することが大切です。

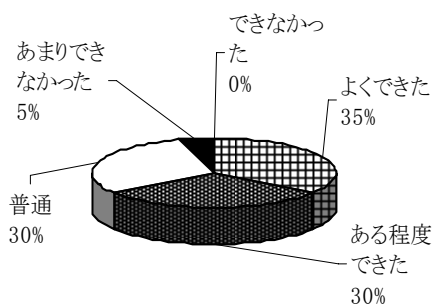
- ①マイ・チャレンジ活動の目的(自分) ②心に残ったこと・学んだこと・新たな発見
③大人のひとと話したこと ④家のひとと話したこと ⑤マイ・チャレンジの体験を今後
にどう生かしたいか ⑥友達の体験から気付いたこと ⑦感想

○ まとめ(回答結果・記述例)

家族と活動について話し合いましたか



事業所の方々と交流できましたか



活動のねらいや指導上の留意点としてあげた地域の人々や働く人々との交流を図ることができた。また、あらためて家族とのコミュニケーションの意義をとらえ直す機会となった。

感想

満足感	楽しくできた。
多様な体験	いろんな事ができた。
活動への興味や関心	別の活動もしてみたくなった。
社会への関心や理解	職場について分かった。社会について知ることができた。
苦労	仕事は楽かと思ったらつらかった。勤務の大変さが分かった。
充実感、苦労	すこしためになった分、疲れた。
充実感	やり遂げた気持ちでいっぱいだった。
礼儀、マナー	人として生きていく上で大切な事を学んだ(あいさつ)。
人間関係の重要性、他者への気づかい	人間関係の大切さを知った。人に気づかいをするのは、仕事では当たり前なんだと感じた。
苦労	働いている人は、こんなつらい仕事を毎日しているのかと思うと、大変だ。
活動への興味や関心	日がたつにつれて、仕事をやる楽しみが増えてきた。活動が終わったら寂しさを感じた。
活動への興味や関心	学校にいるよりも毎日楽しかった。仕事をするのは結構楽しかった。
自信、苦手意識の克服	苦手と思っていたこともやったので、苦手克服になった。
活動への興味や関心	将来の仕事を決めるのに道が広がった。また、違う仕事もやってみたい。
苦労	大人の仕事が簡単だとは思っていなかったが、一週間であんなに疲れるとは思ってもみなかった。
多様なコミュニケーション	家の大人の人以外の大人と話せたことがよかった。
多様なコミュニケーション	たくさんの人と交流ができてよかった。就職するときに役立てたい。
多様なコミュニケーション	自分から積極的に分からないことや教えてほしいことを聞いたので大人とのコミュニケーションが深まったと思う。
自信、苦手意識の克服	小さい子はあまり好きではなかったのに、保育園に行ったら好きと感じられた。
満足感、多様な体験、充実感	毎日がすごくはやく過ぎたが短い間に大切なことをたくさん学べた。やってよかった。
多様なコミュニケーション	接客では、お客さんとのコミュニケーションをとることが大切だと分かった。
感謝	マイ・チャレンジでお世話になった方々に感謝したい。
礼儀、マナー	あいさつ、礼儀作法がとてよくなった。
自信、苦手意識の克服	注意されたことをプラスにして頑張れた。
満足感や充実感	少しだけ大人になったような気がした。マイ・チャレンジのおかげで体力がついた。

事例から学ぶこと

- ① 体験活動のまとめの感想やアンケートの記述から読み取ると、活動を通して自己有用感や自己肯定感が得られていることが分かります。
- ② 「様々な人々とのコミュニケーション」や「他者への気づかい」、「礼儀、マナーの大切さ」や「苦労」など、活動を通して、人間関係形成能力及び情報活用能力に関わる意識や態度の変容が促されていることが分かります。
- ③ 活動を通して、学校での学びの重要性を言葉にする生徒は少ないようです。貴重な経験を、日々の取組に生かそうとする態度の育成につなげるためには、系統的な進路学習に体験的な活動を組み入れて展開することが求められます。

事例 13〔中学校〕地域の人々の声から社会体験活動の成果を把握する

この中学校は、地域との連携を基盤とした社会体験活動を積極的に展開しています。家庭や地域の人々と、活動を通じた生徒の意識や態度の変容を共有することで、学校、家庭、地域が協働して児童生徒のキャリア発達を促すようになることが期待されています。

○ 活動のねらい(指導目標)

- (1) ※ 心の教育の視点からの目標 (省略)
- (2) 地域の人々と生徒の関係を深化させ、生徒を育む取組を地域に浸透させることにより、地域における教育力の掘り起こしを行う。

関連する能力 → 人間関係形成能力(自他の理解能力)、情報活用能力(職業理解能力)

○ 事前の活動

夏休みの課題として、「職場体験事前レポート」を作成する。

- ① 希望する職種を三つ選び、それらについてレポートを作成する。
 - ② 調べる項目について、図書館などで書物を使って調べる。
 - ③ 家族や知人などから話を聞いて調べる項目についてまとめる。
 - ④ 5、6は、各自、特に調べたい項目があれば考えて、調べてみる。
- レポートの項目
- 1 どんな仕事をしていますか? (仕事の内容)
 - 2 どんな環境で働いてますか? (職場の環境)
 - 3 どんな心がけが必要ですか? (仕事上の注意点)
 - 4 大変なことはありますか? (仕事の難しさ) 5、6 各自設定

関連する能力 → 情報活用能力(情報収集・探索能力、職業理解能力)

○ 活動のまとめの視点(まとめの項目)

- (1) 事後反省の記録 (記述による活動のまとめ)

(省略)

- (2) マイ・チャレンジ事業 アンケート (選択肢)

(保護者)

- 1 お子さんとマイ・チャレンジについて事前に話し合われましたか?
- 2 期間中にお子さんとマイ・チャレンジについて話し合われましたか?
- 3 活動を通して何かお子さんに変化はありましたか?
- 4 活動を通してお子さんの見方が変わりましたか?

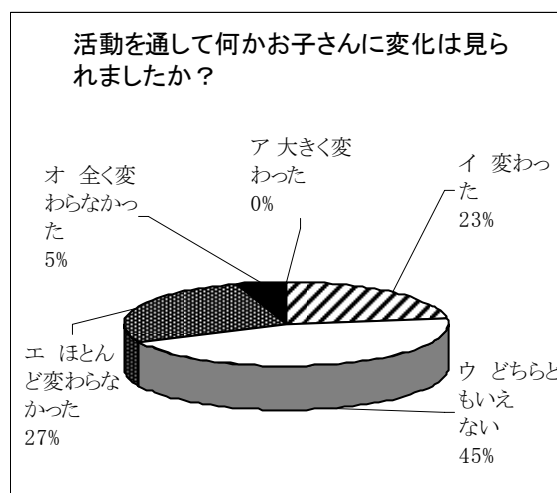
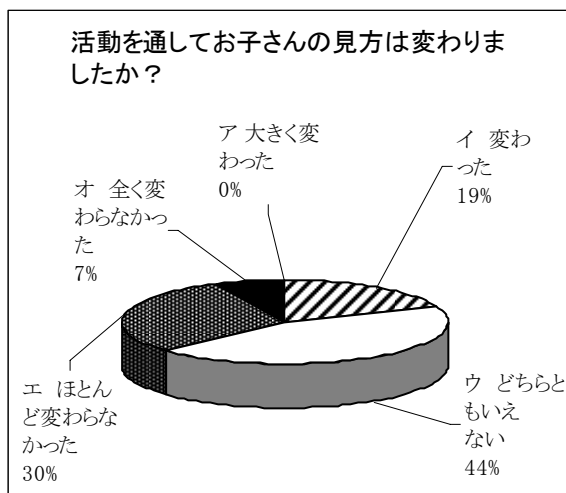
(事業所)

- 1 職場体験学習に対する生徒の取組はどうでしたか?
- 2 職場体験学習を通して、生徒たちに変化が見られましたか?
- 3 この一週間で中学生に対する見方は変わりましたか?

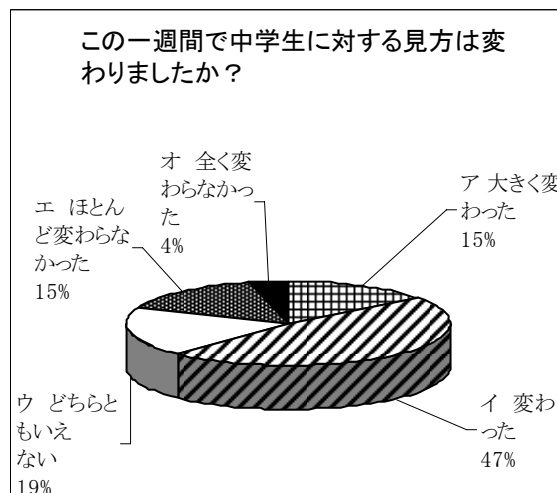
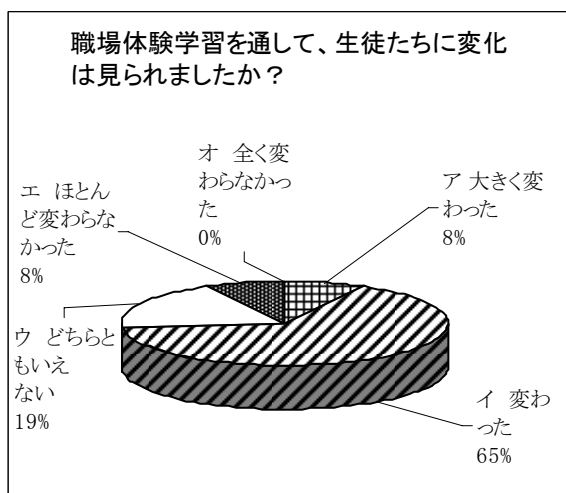
※ 生徒、教職員以外に、保護者と事業所にもアンケートの回答を依頼した。

○ まとめの回答結果

（ 保護者 ）



（ 事業所 ）



事例から学ぶこと

社会体験活動を通じた生徒の変容は、中学生や高校生の発達段階の特徴もあって、保護者の前では現れにくい面もあると考えられます。むしろ、体験先の大人のほうが子どもたちの変容をよりはっきりと意識しているという面もあります。この事例では、地域の人々の声を積極的に取り上げて、成果を明らかにしています。このようにして、体験活動の成果を、家庭や地域と共有することで、その後の進路学習の発展や次年度の体験活動の改善につなげることができるようになります。

事例 14〔高等学校〕インターンシップを生かして、高校における学びの基盤となる積極性や他者に関わる態度を育成する

この高校では、第1学年の進路学習に位置付けてインターンシップを実施しています。職業人として生きていくために必要な資質・能力が、高校における学びの基盤ともなっていることを、生徒に再確認させるねらいがあります。

■ インターンシップのねらい

この高校では、生徒が体験を通して社会規範やマナーの必要性あるいは意義を実感して実践できるよう、指導しています。このような生活の基盤づくりを充実させることは、学びの充実につながるものと考えられます。

また、インターンシップにおいては、自ら考えて、積極的に行動することを重視しています。「自分だったらどうだろう？」という問いは、探索的、試行的な行動を促すもので、高校生の学習の質にふさわしい課題と考えられます。

〔 職場体験活動のねらい 〕

『職場体験学習』マニュアル』より

I 努力目標

キャッチフレーズは **一緒に働きたいと思われる人になろう！**

- (1)「元気なあいさつ」と「ステキな笑顔」を忘れない！
- (2)「はい」「わかりました」「すみませんでした」「ありがとうございます」などの言葉が自然にでてくるような態度を心がけよう！
- (3)自分だったらどうだろう？という具体的な問いかけをしてみよう。
- (4)周りの人への感謝の気持ちを忘れないようにする。日誌など記録をしっかりと残し、あとになって振り返ることができるようにしよう。

視点1 「人間関係形成能力」 特に「コミュニケーション能力」

自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意志などを的確に理解する。

視点2 「情報活用能力」 特に「職業理解能力」

社会規範やマナーなどの必要性や意義を体験を通して理解し、習得する。

視点3 「将来設計能力」 特に「役割把握・認識能力」

学校・社会において自分の果たすべき役割を自覚し、積極的に役割を果たす。

視点4 「キャリア」

キャリアは経験の累積であり、それらを事後に振り返り、理解を深める。

■ 事前の学習のポイント

生徒に、体験を通して、社会規範、マナーの必要性、意義などを実感して、実践できるようにすることを目標として意識させています。

体験中のマナーとルール

- (1) 自分の携帯電話は絶対に電源を切り、必ずバッグに入れておくこと！体験中は絶対に携帯電話を操作してはいけません！
- (2) 職場で初めてお会いする方々には、「おはようございます」「よろしくお願いします」など気持ちのいいあいさつを忘れずに。
- (3) お客様にはもちろんのこと、職場で働いている方にもしっかりした敬語を使い、「です」「ます」を使って丁寧に話そう。相手の目を見てしっかり話そう。
- (4) 一緒に体験する友達同士でも公の場であることをわきまえて、友達言葉（ため口）で騒いだり、乱暴な言葉を使ったりしない！
- (5) 「単語」だけでなく「文」できちんと話そう。
- (6) 分からないことがあったら自分から聞くこと。指示待ちではいけません。

■ 評価のポイント

学習の成果を次の(1)、(2)、(3)の資料にまとめたものを評価しています。具体的な評価票を明示することで、体験に臨む態度の育成が図りやすくなると考えられます。

- (1) 事前及び事後にわたって学習ノートに記入したもの
 - ・各自「学習ノート」の『職場体験学習 日誌』に毎日記入すること。
 - ・記録した日誌は、体験先の職場の方に毎日提出して「確認印」をいただくこと。
 - ・質問票にある質問の回答を学習ノートに記入すること。
 - (2) 職場体験実施報告書（所定の用紙）
 - (3) 評価票
 - ※ 次のような評価票を体験先をお願いしてあります。
 - ※ 生徒自身も同じ項目で評価します。（自己評価）
- 次の項目①～④それぞれについてA～Cの3段階評価をして右の名簿にしたがってご記入してください。

評価項目	評 価 内 容	良い	普通	悪い
①出欠状況	・決められた日数休まずに参加できたか。 ・決められた時刻に出社、退社したか。	A	B	C
②体験状況	・素直な態度で指導を受けていたか。 ・熱心さや真面目さがあったか。 ・協力的な態度であったか。	A	B	C
③服装、応対	・服装や身だしなみに気を付けていたか。 ・言葉づかい、応対はきちんとできたか。	A	B	C
④総合	・以上、総合してどうだったか。	A	B	C

■ 活動中及び事後の学習のポイント

日誌に一日一日の活動の様子を記録したり、考えたことや気付いたことを書きとめさせたりすることは、そのときの振り返りを促して、より体験を充実させます。さらに、事後に報告書をまとめる際に活用するとともに、その後の進路の選択や決定のよりどころとすることができます。

『職場体験学習 日誌』の記入例

(**1** 目 目)

17年11月1日(火)		体験場所		○ ○ ○ ○ 病院	
今日の記録		赤ちゃんのミルクではなく、甘いお粥を飲ませる。 *生まれたての赤ちゃんはミルクではなく、甘いお粥を飲ませる。 その子の腸がまだできていないから、ミルクだと胃が痛くなる。 たまたましりもちっ。 *赤ちゃんから次の赤ちゃんをさわる時は、きちんと手を洗う。 病気がうつるからっ。 病 - 診察 - 病名 治療 - 検査 - 予防 (健康法) 11月1日 (検査が済んだ) 石炭教育 患者さんの権利 ① 良質な医療を受ける権利 ② 生命、人格を尊重される権利 ③ 同検査や治療目的、方法、内容および病状の に関する権利 ④ 治療法や検査を受ける権利 ⑤ フォロワーシップが保証される権利 * 患者さんの一言一言に耳を傾けていた。 * 患者さんのさりげない言葉にも気づいていた。 * 「へい、はすね」と状況をきちんと毎回言っていた。			
箇条書き、 あるいは図 を書き加え るなど、自 由な表現方 法で記録し ています。					
今日の感想					
今日は、初めて看護の体験をしてドキドキしていました。あこがれのナースキャップ もかぶりしました。今日は、緊張して質問ができなかったけど、いろいろな患者さんと接 していて、看護師は忙しくせわしない仕事だと感じました。でも、要求に応えた後の患 者さんの「ありがとう」という一言で、私の中で看護師は「たいへんな仕事」というイ メージから、「よろこばせるための仕事」というイメージに変わりました。					
今日の学習について自己評価しよう	・ 関心、意欲はあるか。 ・ 授業 (参加の) 態度はよかったか。 ・ 理解することはできたか。	A・B・C A・B・C A・B・C	確認印		

事例から学ぶこと

体験先からの評価としては、中学校段階では、「言われたことをきちんとやる」ということでも十分に認められますが、さらに、高校段階では、「自ら積極的に指示を求めるような姿勢や行動を示す」ことが求められます。このことは、学校での学習にも生かされるものです。本事例では、社会でも大切なことが学習の基盤となることを実感させようというねらいがあります。

事例 15〔高等学校〕生徒の主体的な参加意欲を重視してインターンシップを実施する。

この高校では、生徒に対し、多様な体験活動への積極的な参加を促しています。その一つとして、第2学年の希望生徒を対象にインターンシップを実施しています。

■ 進路学習展開の基本方向とインターンシップの位置付け

(PTA総会資料より)

本年度の最重要課題と具体策

勤労観や職業観を育む

- ・「職業に就く」ということは、生活を支える経済的基盤をつくるばかりではない。
- ・職業を通して自分自身が成長し、さらに広く社会への貢献へつながっていく、生涯を通して関わる最も大切なことの一つである。

自ら積極的にキャリア・アップを図ろうとする態度の育成を重視しています。

各学年の概要

【2年生】

夏休み中に、全員がそれぞれに何かしらの「体験学習」をし、報告をしていただきます。また、昨年度に引き続いて「インターンシップ」を希望者に対して実施します。7月下旬の5日間です。さらに、各種の説明会やオープン・キャンパス、体験型研修に積極的に参加させてください。

体験を通して自分の希望や将来設計に対する自信と確信をもてるようにする。

■ インターンシップのねらい

- (1) 進路に関して学習している内容を、実際の職場で体験し、職業人に求められる勤労観や職業観を体感して、職務遂行に伴う倫理観を、体験を通して学ぶ。
- (2) 体験を通して、地域企業への理解を深め、地域に貢献できる素地をつくる契機とする。
- (3) 保護者や学校の教職員以外の大人と接することで、異世代間コミュニケーションの能力向上を図る。
- (4) 就業現場においての実践的な知識や技能に触れることで、学校での学習の意義を再確認する。

※ 高校段階にふさわしい発達課題を設定します。

就業などの社会参加や上級学校での学習などに関する探索的・試行的な体験に取り組む。

■ インターンシップによる生徒の意識の変容

○ インターンシップに関するアンケート [第2学年 23名]

(各項目の回答数/参加者数)

項 目	活動前	活動後
参加することへの期待と満足度	○ 参加することをどう思いますか。 〔選択〕 ア 是非参加したい (16/23) イ 参加したい (7/23) ウ 参加したくない (0/23)	○ 参加してどう思いますか。 〔選択〕 ア 大変よかった (18/23) イ よかった (5/23) ウ よくなかった (0/23)
学びへの期待と成果	○ どのようなことが学べると思いますか。 〔自由記述〕 ①働くことの意味、大切さ、楽しさ (11) ②人間関係、異世代間のコミュニケーション (5) ③仕事の内容、社会勉強 (4) ④職業適性 (4) ⑤社会のルールやマナー (3)	○ 学んだことは何ですか。 〔二つ選択〕 ア 働くことの大切さ (6) イ 働くことの厳しさ (3) ウ 仕事に関する勉強の必要性 (0) エ 体力の必要性 (4) オ あいさつ、言葉遣いの大切さ (9) カ 身だしなみの大切さ (0) キ 時間を守ることの大切さ (4) ク 人間関係の重要性 (7) ケ 学校と社会の違い (6) コ 企業の役割、責任の重さ (2) サ 働くことの楽しさ (1)
働く目的	○ 働く目的は何だと思えますか。 〔二つ選択〕 ア 自分の能力を試すため (4) イ 自分を成長させるため (8) ウ 楽しい生活を送るため (9) エ 経済的に自立するため (15) オ 経済的に豊かになるため (7) カ 会社の発展のため (1) キ 社会に奉仕するため (2)	○ 働く目的は何だと思えますか。 〔二つ選択〕 ア 自分の能力を試すため (2) イ 自分を成長させるため (11) ウ 楽しい生活を送るため (10) エ 経済的に自立するため (10) オ 経済的に豊かになるため (7) カ 会社の発展のため (2) キ 社会に奉仕するため (4)

働くことの多様な側面に気付くと、働くことに対するイメージが具体的になったり、回答も多様化したりします。

事例から学ぶこと

① 現実的な理解を促すこと

小学校段階と異なって、中学校や高校の段階になると、夢やあこがれだけで将来の生き方や進路を考えることはできません。働くことに対する現実的、具体的な理解が求められます。

② 個々人の勤労観や職業観

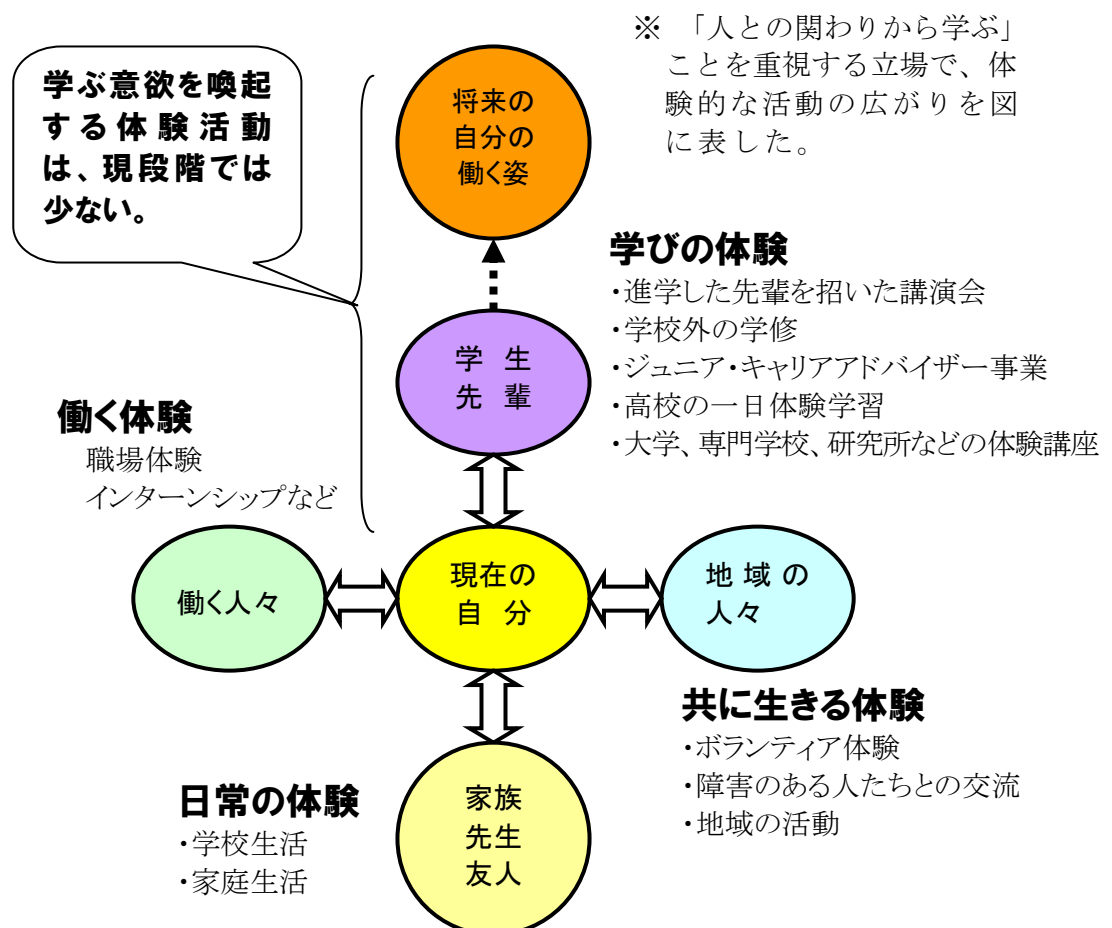
勤労観や職業観については、その人なりの個性の部分と、多くの人々に共通する部分とがあることに気付かせることが大切です。

解説8 キャリア教育における体験的な活動の広がり

キャリア教育では、幅広い体験活動を通して、キャリア発達を促します。職場体験やインターンシップは、働く人々の姿を通して、仕事の内容を直接知ることができる有意義な活動です。また、社会に貢献することをより重視するボランティア活動や、職場以外にも、家庭や地域で役割や責任を果たす活動もあります。また、希望の仕事に就くため真剣に学んでいる学生や先輩たちの姿に触れるような、学びの体験活動も意義あるものです。

多くの中学生、高校生が、さらに上級学校で学ぶ現状からも、学習や経験を重ねて資質・能力を高めていくことが不可欠です。あこがれているだけでは希望の仕事には就けません。学ぶ必要や、資格をとるための努力が必要なこともあります。今後は、そうしたことを実感できる、学びの体験活動を含む学習プログラムの開発が期待されます。

■ キャリア教育における体験的な活動の広がり



■ キャリア教育にあたって注目される事業や活動

文部科学省だけでなく、関係省庁、都道府県、さらに地域が協力して、新たな試みが進められています。従来から行われている体験的な活動に広がりをもたせ、さらに充実させるために、こうした取組に注目していくことが大切です。

ジョブカフェ

厚生労働省と経済産業省が推進する事業で、キャリア・カウンセリングから研修、就職あっ旋まで、若者の就業を支援するワンストップサービスセンター（通称：ジョブカフェ）を設置して、若年者の雇用対策を充実させる事業です。高校生のインターンシップの推進にも当たっています。ジョブカフェは都道府県が設置しますが、運営やプログラム開発を民間委託する例もあり、関係省庁が縦割り行政の壁を破って協力、支援することになっています。

○ 栃木県では「とちぎ就職支援センター」がその機能を担当しています。

宇都宮市本町3-9 県庁南庁舎2号館（本町合同ビル）1階 TEL 028-623-3226

インターンシップ、デュアルシステム

インターンシップとは、産業の現場で「生徒が在学中に自分の学習内容や進路に関連した就業体験をする」ことです。正規の学校教育活動の一つで、単位として認定することもできます。すべての高校生にとって、産業や職業の現場を知ることは、将来の生き方や進路を考える上で有意義なことです。

デュアルシステムとは、ドイツの職業学校における職業訓練制度で、週に数日程度職業訓練に充て、企業で実際に働きながら職能を身に付ける制度です。就業期間分の単位が認められ、給与も支払われています。平成17年度から文部科学省の施策として推進されている「日本版」は、職業意識や勤労観の育成に重点を置き、卒業後の進路と切り離しているのが特徴です。他の都府県では、学校と連携した企業において、10日間程度のインターンシップにはじまり、2か月から4か月程度の長期就業訓練へと就業訓練を段階的に経験することにより、実践的な技術や技能を身に付ける制度を導入した例があります。

○ 厚生労働省・日本版デュアルシステム

<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syokunou/dual/index.html>

ジョブシャドウ

働いている人の後ろに張り付いて仕事を体験したり、見聞きしたりすることによって、実際の職務の在り方や勤労について学ぶことができる活動です。企業の経営のように、中学生や高校生では体験が難しい職務について理解するのに適しています。

YES-プログラム

Youth Employability Support Program(若年者就職基礎能力支援事業)

企業が若年者の就職に関して特に重視している「コミュニケーション能力」、「職業人意識」、「基礎学力」、「ビジネスマナー」といった就職基礎能力の修得を支援することを目的に、厚生労働省が創設した事業です。

就職に関わりの深い基礎能力の領域ごとに、厚生労働大臣が認定した講座や試験について修了または合格し、あわせて情報、経理、語学関係の資格（別途定められているものに限る）を一つ以上取得することにより、厚生労働大臣名の「若年者就職基礎能力修得証明書」の交付を受けることができます。

○ <http://www.mhlw.go.jp/general/seido/syokunou/yes/>

ジュニア・キャリアアドバイザー

専門高校あるいは学科の高校生が、学習で得た知識や技能をもとに、小学生や中学生に野菜の栽培やものづくりを指導することにより、小学生や中学生の働くことへの関心・意欲の醸成を図るとともに、高校生の勤労観や職業観及びコミュニケーション能力を育成しようとする事業です。

キャリア・スタート・ウィーク

子どもたちの勤労観、職業観を育てるために、中学校において5日間以上の職場体験を行う学習活動が、文部科学省の施策として平成17年度から推進されています。「キャリア・スタート・ウィーク」は、子どもたちが働くことの喜びや厳しさを学び、学習に対する意欲を向上させるための貴重な体験となります。本県では、すでにマイ・チャレンジ事業が定着していますので、活動の成果をキャリア教育の視点から検討して、より質の高い活動にしていけることが期待されています。

○ リーフレット http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/019/001.pdf

中学生マイ・チャレンジ事業

栃木県教育委員会が「心の教育」の一環として推進している事業で、中学生がまとまった一定の期間、学校を離れ地域に出て人々との関わりを主とした社会体験活動を行うものです。平成12、13年度から「マイ・チャレンジ推進事業」をパイロット事業として実施して、平成15年には、県内の約85%の中学校2年生が、5日間連続した社会体験活動を行うまでに広がりました。

平成16年度からは、名称を「中学生マイ・チャレンジ事業」と改め、学校や地域の特性を生かした活動ができるよう改善することにより、地域や家庭との連携、協力による中学生の社会体験活動を一層促進することを目指しています。

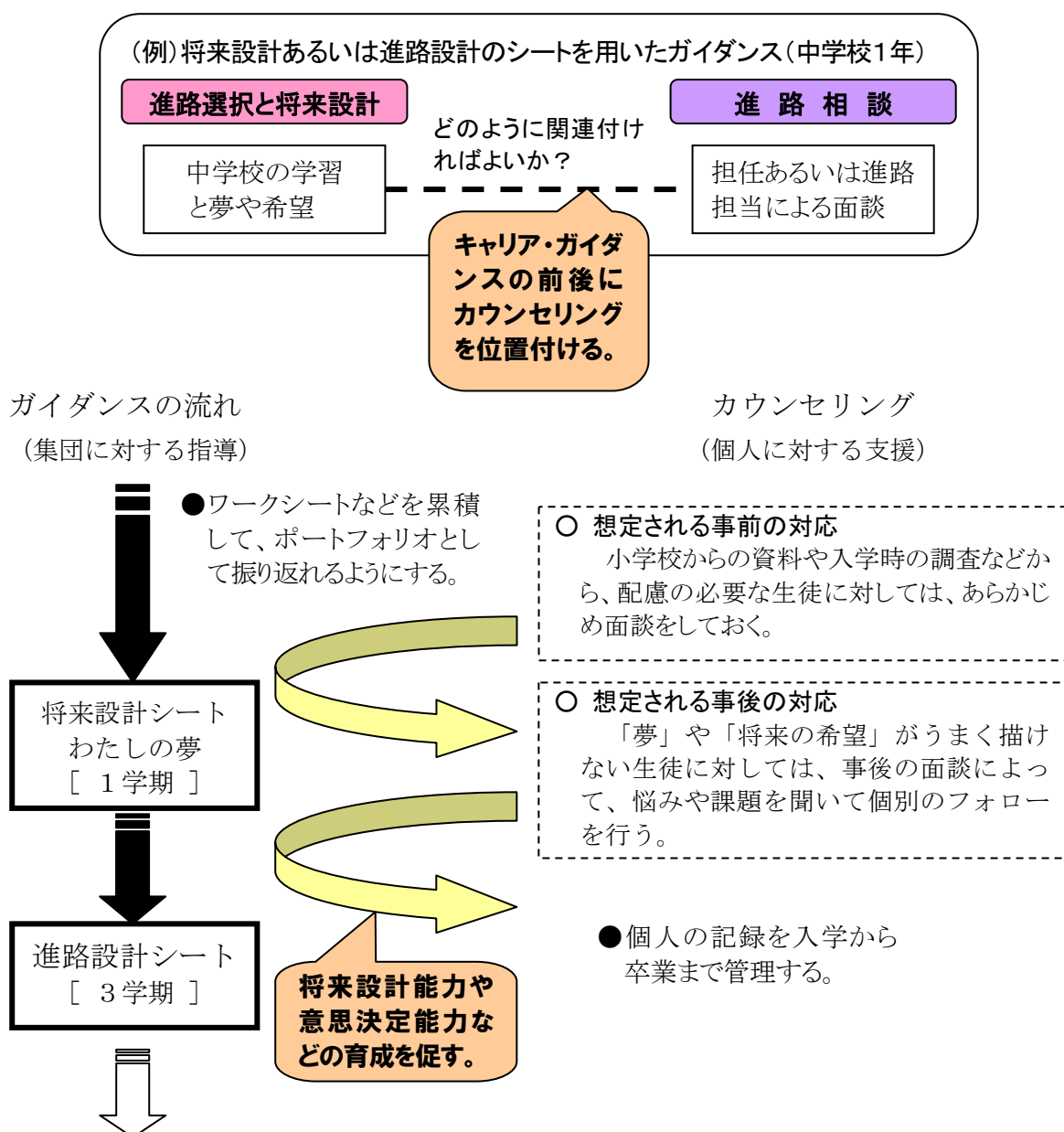
○ <http://www.pref.tochigi.jp/gakkou-kyouiku/gimu/mychare/index.html>

POINT 4 ガイダンスとカウンセリングとをつなぐ

進路指導においては、ガイダンス的な要素が強いため、心理面も含めて、生徒の側に受け入れる準備が整っていないと、情報をどのように活用したらよいか分からず、円滑に進路学習が進まないケースもみられます。そこで、キャリア・カウンセリングを行うことにより、生徒の心理面にアプローチし、課題を明確化させることが期待できます。

カウンセリングは、ガイダンスの後のフォローだけでなく、ガイダンスの前段階にも位置付けることで、補完的な役割を果たすことができると考えられます。

イメージ図 キャリア教育におけるガイダンスとカウンセリングの関係



事例紹介

ここでは、進路希望が似ているなど、共通の志向性をもった数名の生徒からなるグループを編成して行う、グループ・カウンセリングの実践を紹介します。

事例 16〔高等学校〕進路ガイダンスの一環としてグループ・カウンセリングを実践する

この高校では、2年次からのコース選択に向けたガイダンスの一環として、グループ・カウンセリングを行って、個別支援を試みました。

■ グループ・カウンセリングのねらい、実施形態、進め方

ここでは、上越教育大学の三村隆男助教授が、その著書の中で紹介しているボード・カウンセリングの手法をもとに実践しました。

『キャリア教育入門 その理論と実践のために』（実業之日本社）

○ ねらい

多くの学校で行われている面談は、学級やホームルーム単位で担任が個別に指導するケースがほとんどです。これに対し、グループによるキャリア・カウンセリングは、学級やホームルームの枠を超えて、同じような意識や進路希望をもった生徒同士で集団をつくり、キャリア・カウンセリングを行うという点で、従来とは異なる新しい手法と考えられます。

○ 実施形態

(1)構成メンバー

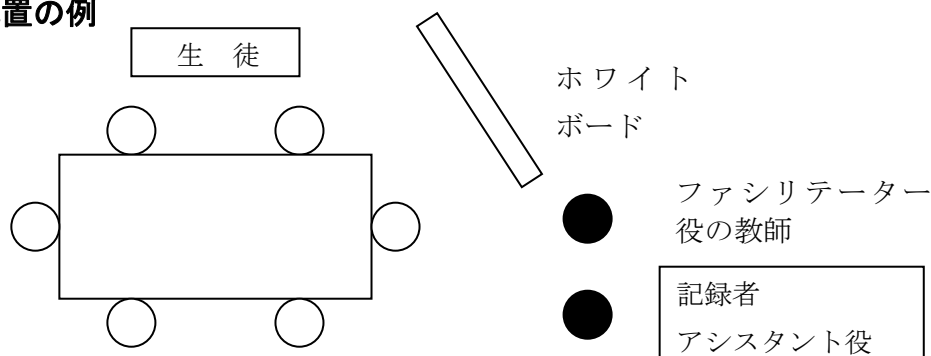
- ・ 共通の分野を希望、あるいは志向する生徒数名。
- ・ ファシリテーター役の教師 1 名。
- ・ 記録や進路情報に関する質問への対応のため、アシスタント役の教師が参加する場合もあります。

(2)準備

- ・ 職業レディネステストの結果を持参させます。自己採点したものを持参させる方法のほか、自己採点を適宜この活動の一部に取り入れることも可能です。
- ・ ホワイトボード（ペンは3色）、名札（呼んでほしい名称をあらかじめ書かせます。）

(3)所要時間 ： 60分

(4)会場及び配置の例



○ 進め方

以下の進め方はあくまでも一つの例であり、適宜アレンジが可能です。

① ボード・カウンセリングの開始を宣言（ファシリテーター）（3分）

- ・話し合いの目的を説明する。
- ・目的を確認する。

進路実現のためには、どのようなことを明確化すれば学習に取り組みやすいのか整理する。

- ・ここで話し合われた個人的なことは、この場だけにとどめる。
- ・積極的に発言するが、個人攻撃や揶揄は避ける。
- ・感情的にならない。
- ・他者の発言を傾聴する。
- ・最後に感想を話してもらうので、気付きや感情の動きを大切にして覚えておく。

② 参加者の信頼関係づくりを兼ねた自己紹介（5分）

- ・緊張をほぐし、安心感をもって、効果的な話し合いが展開できるようにする。
 - はじめの生徒「～の好きな～です。理由は～だからです。」
 - 次の生徒「～の好きな～さんの隣の～が好きな～です。理由は～だからです。」以後続ける。

③ 課題の開示（10分）

- ・参加者全員から、直面している課題（進路選択）に対する不安、悩み、疑問を端的に挙げてもらい、ファシリテーターがボードに記入していく。（それぞれ発言者の名前を青で入れる。）

④ 課題の説明（15分）

- ・ボードに書かれたものについて、一人ずつ発表してもらい、それに対し、他の参加者は質問、意見を述べる。ファシリテーターは、受容、共感、質問、整理を繰り返す。うまく発言できない生徒へは声かけをし、安心して参加できるよう配慮する。
- ・同じような内容でも、背景は異なるので、全員に発言してもらう。参加者は受容あるいは共感の姿勢で傾聴する。

⑤ 意見交換及び整理（15分）

- ・出された意見を聞きながら問題を整理し、発言した本人がある程度解決されたと認識されたものには赤で線を引く。残った問題に対し、さらに意見交換をし、整理する。所定の時間が経過したら、そこで終了とする。課題が残ってもよい。

⑥ まとめ（7分）

- ・一人一人に感想を述べてもらい、参加者でシェアリング（分かち合い）をする。各自の気付きを大切に、次の行動につなげる。ファシリテーターは、生徒が課題に取り組むにあたって、参考になる情報があれば提示してもよい。

⑦ 振り返り用紙記入（5分）

- ・話し合いを通して感じたこと、気付いたことを各自整理する。

○ 実施にあたっての留意点

この話し合いの中では、生徒は少なからず自己開示を求められます。何らかの理由（いじめにあった経験がある、周囲の目を過剰に気にするなど）で自己主張をためらう生徒には、グループ・カウンセリングを無理強いしない配慮が必要です。このような生徒には、個別相談を継続して、参加できるようになってから導入を考えた方がよいでしょう。また、ファシリテーター役の教師は、話し合いの途中で話題がそれたり、特定の参加者が非難されたりした時は、即座に介入し、円滑に話し合いが展開されるよう配慮します。

適切な実施人数は、ファシリテーター役の教師1名に対して、5～7名程度と想定されます。なお、受験期はライバル意識が強くなることから、1学年での実施が効果的と考えられます。

○ 実施後の留意点

参加者の中には、新たな疑問や不安が生じる場合もあるので、その後のサポートを怠らないようにします。特に、振り返り用紙を通して心情を把握するとともに、課題が明確化された場合は、その解決に向けて具体的な方策が見いだせるよう援助することが大切です。また、個別の相談が必要な場合には、できるだけ早い時期に実施できるよう、日程、担当者の調整をします。

○ 発展の方向性

共通の課題が見えた場合は、それぞれが研究を進め、分かったことを次回持ち寄ります。進路研究を進める上で、教師からのガイダス的なアプローチが必要となることがあります。資料の提供やインターネットを活用した情報収集の仕方をはじめとし、個々の生徒に応じた適切な援助が求められます。その際に、校内の教職員のみならず、校外の人材も含めて、誰が援助資源となり得るのかを判断し、つながりを付けていくことが大切です。あくまでも生徒主体というスタンスで進めることで、進路意識の高揚を図りますが、進路指導のガイダンスの機能を充実させるきっかけとなることが期待されます。

以後、このグループ・カウンセリングは必要に応じて開催しますが、これに依存するだけでなく、生徒間で日常的に自主的な情報交換がなされ、互いに視野を広めつつ、それぞれが自己実現に向けて学習に取り組んでいくことを目指します。

振り返り用紙

実施日 月 日

1 年 組 番

今日のグループ・カウンセリングはあなたにとってどうでしたか？ふりかえてみましょう。

I. あてはまる数字に ○ を付けてください。

- | | 4 | 3 | 2 | 1 |
|---------------------------------|--------------------------------------|---|---|---|
| 1. リラックスして参加することができたと思いますか | | | | |
| | とてもそう思う ややそう思う あまり思わない 思わない | | | |
| 2. 自分の考えや気持ちを言うことができたと思いますか | | | | |
| | とてもそう思う ややそう思う あまり思わない 思わない | | | |
| 3. 自分の考えや気持ちを他の人に分かってもらえたと思いますか | | | | |
| | とてもそう思う ややそう思う あまり思わない 思わない | | | |
| 4. 他の人の考えや気持ちが分かったと思いますか | | | | |
| | とてもそう思う ややそう思う あまり思わない 思わない | | | |
| 5. 自分にとっての課題が見えてきたように思いますか | | | | |
| | とてもそう思う ややそう思う あまり思わない 思わない | | | |

II. 今日のグループ・カウンセリングを通して、気付いたこと、感じたこと、考えたことなどを書いてください。自分なりの課題が見えてきた人はそれについても書いてください。

■ 実践の資料1 グループ・カウンセリングの概要

○ 第1回 平成 17 年 11 月 11 日 ファシリテーター役1名、記録者1名、教員の参加者4名

※ 医療・看護・福祉などの分野を志望している生徒 13 名。今回は、希望した生徒を全員参加させたため、6 名と 7 名の二つのグループを編成した。

Step1 来室順に名札を書いてもらう。(フルネーム、好きな色のマジックで)

- 1 メモ、写真撮影の了解を得る → 2 担当者の自己紹介(名札は生徒と同じように作成)
- 3 留意点の確認 → 4 流れの説明 → 5 参加者自己紹介
- 6 テーマの提示

進路実現のためには、どのようなことを明確化すれば学習に取り組みやすいのか整理する。

- 7 一つずつ挙げてもらう。
 - ・生徒の様子(発表者を指定したらためらいの表情。となりと顔を見合わせる様子)
- 8 近くの2、3人で2分程度、話してもらう。
- 9 その間にホワイトボードにテーマを書く。

Step2 グループごとに「明確にすべき課題」発表してもらう。(司会者が板書)

・生徒の様子(この頃から自由に話し始めた)

Step3 考えていく上でのアイデアを集める。(情報の入手先、相談する先生、調べる方法)

Step4 まとめ

1 ファシリテーターの説明

・残った課題は調べてみる。
・一人一人の状況が最も分かっている先生に相談する。
・せっかく会った仲間どうしなので、廊下でも積極的に声かけをしたり、情報交換の機会をもったりできるとよい。

- 2 感想を述べる(一人ずつ) → 3 振り返り用紙記入
- 4 レディネス・テストの説明(12月期末試験後に実施する。)
- 5 最後にねぎらいの言葉 お互いに拍手 → 終了

○ 実施後の教員によるミーティング

- ① 成果:「共感」という言葉が多く生徒から引き出せた。従来のガイダンスやカウンセリングではなかなか得られない手応えを感じることができた。
- ② 方法について気付いた点
 - ・あるクラスの参加者だけが多いような偏りがあると、参加者の少ないクラスの生徒が気後れする傾向が見られた。
- ③ 今後に向けて
 - ・流れは簡単であるが、生徒から発言を引き出すために、多少慣れが必要である。
 - ・担当者は担任でない方がよいかもしれない。
 - ・今日の様子から次回も生徒は参加するのではないか。
 - ・生徒は進路に関する理解が不十分なので、ガイダンスとしても十分意義がある。
 - ・2年生でも実践は可能と思われる。

○ 第2回 平成17年12月14日 ファシリテーター役1名、記録者1名、教員の参加者1名

※ 医療・看護・福祉などの分野を志望している生徒3名。今回は、カウンセリングとしての効果をはっきりさせるため、前回よりも少人数で実施した。

Step1 来室順に名札を書いてもらう。(前回使用したもの)

1 導入

「前回から今回の間に変わったこと、調べたこと、話したことは？」
⇒「ない。期末テストがあったので・・・」

2 テーマの提示

看護・医療系の職業に求められる資質・能力について、話し合いを通し考える。

3 流れの説明

今回は生徒間の話し合いを中心に展開することを伝える。

Step2 話し合い

- ① 「看護」、「医療技術」、「介護サポート」のそれぞれの分野に抱くイメージ、求められる資質や能力はどんなものか各自で考えさせ、まず、一人一つずつ具体例を挙げてもらおう。
 - ・外見、資質、出会った人から受ける印象など、できるだけ数多く具体例を出してもらおう。
 - ・一枚の付箋紙に一つずつ具体例を書かせる。
 - ・まず、看護について書いたらホワイトボードに貼り付けさせる。
(あとで説明してもらうので、一人一人のブロックに分けて貼る。)
 - ・同様に、医療技術、介護サポートについても考えさせる。
- ② 看護から順に各自が考えた内容を発表していく。
他の人と同じ意見であっても、そう考える理由はそれぞれ違うので、すべて発表してもらい、一人一人の考えを大切にする。
- ③ 司会者は、参加者がそのように考える背景について、適宜質問をし、イメージの明確化を図る。
- ④ 医療技術、介護サポートについても同様に進める。
- ⑤ すべて終了したら、付箋紙を整理する。
 - ・共通するものを集める。(参加者に出てきてもらい、話し合いながら整理してもらう。)
 - ・司会者は、生徒の発言や追加の意見を聞きながら、ホワイトボード上で、意見が書かれた付箋紙を貼りかえたり、カテゴリーごとにまとめたりする。

Step3 まとめ

1 ファシリテーターの説明

- ・職業に求められる資質や能力は多様である。
- ・自分の資質・能力も幅広くとらえ、伸ばしていくことが大切である。
- ・職業レディネス・テストの結果と自分の予想、希望とのギャップへの対処についてもふれる。
- ・自分の悩みや不安は、当面の目標を明確にし、具体的にに取り組むことで解決の糸口が見いだせる。

→ 2 各自感想を述べる → 3 振り返り用紙記入 → 5 ねぎらいの言葉(終了)

○ **実施後の生徒の意見**

- ・人数は、10名を超えると、自分の意見が出しにくい。
- ・人数が少ないので、自分の気持ちをより素直に表現できた。

■ 実践の資料2 グループ・カウンセリングの振り返り用紙から

(1回 ⇒ 2回の違いを比較した。)

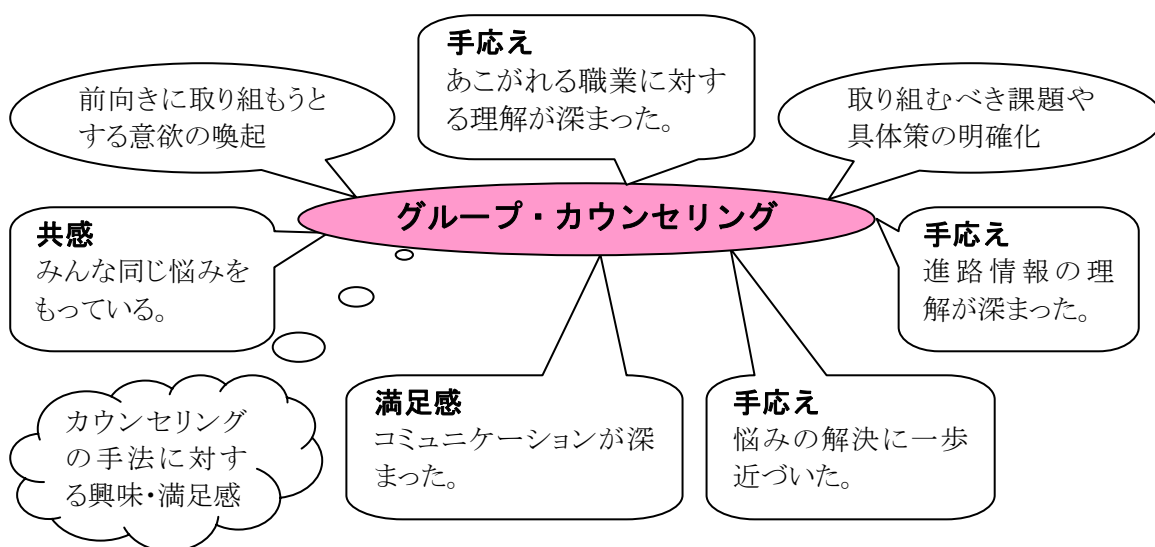
I. あてはまる数字に ○ を付けてください。

	Aさん	Bさん	Cさん
1. リラックスして参加	3⇒3	3⇒3	3⇒4
2. 自分の考え、気持ち 言う	3⇒4	3⇒3	2⇒4
3. 自分の考え、気持ち 分かってもらえた	2⇒4	4⇒4	2⇒4
4. 他人の考え、気持ち	2⇒3	4⇒4	3⇒4
5. 自分の課題	2⇒3	3⇒4	3⇒3

II. 今日のグループ・カウンセリングを通して、気付いたこと、感じたこと、考えたことなどを書いてください。自分なりの課題が見えてきた人はそれについても書いてください。

	1回	2回
Aさん	皆、同じようなことを思っていた。共に励ましあうことができそうだ。	看護に関連することの視野が広がってよかった。
Bさん	同じ進路に進もうとしている人たちと悩みや今考えていることを打ち明けあうことができよかったと思います。これからはもっとたくさんの学校を調べて自分に合った学校をみつけられたらいいなと思います。	同じ職業を目指している人たちと話すことができよかったと思います。これからは勉強だけでなく、その他にも必要なやさしさなどを学びたいです。自分で動くことのできない祖母の面倒をみているおじの手伝いをもっとしていろいろと学んでみたいと思いました。
Cさん	グループ・カウンセリングを初めて受けて、思っていたものとはとても違いました。私自身もっと積極的に取り組むことができればよかったと思います。内容では、もっと他の意見もかわせたらいいと思いました。まだ自分の将来について決まっていないので考えたいと思います	前回に比べると、少人数だったのでとても参加しやすく感じました。自分の考えを数多く言え、友達の見聞もいろいろ聞けました。 自分の意見を紙に書いて貼ったり、いろいろな工夫がされていたので、とても良かったです。まだ自分の進路は、はっきり決まりませんが2回のグループ・カウンセリングを通して、今までにはなかったものが得られて本当によかったです。ありがとうございました。

(記述の特徴：カテゴリー分け)



事例から学ぶこと

相談と聞くと、個別の指導・支援という思い込みがありますが、グループの人数を増やすと、ガイダンスの面を強く出すことができます。また、人数を減らすと、カウンセリングの面を強く出すことができます。目的に応じて、ガイダンスやカウンセリングの構成メンバーを柔軟に変えていくことも、指導の効果を高めることになります。このような実践によって、担任だけの進路相談に任せてしまう指導体制を変え、進路指導部が組織的に動く体制づくりがしやすくなります。